

山脇学園中学校

2023年度 入学試験問題

国語 C

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は50分間です。
3. 問題は□～四までです。
4. 解答はすべて解答用紙に書きなさい。
5. 解答用紙に受験番号、氏名を書きなさい。

① 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

イソップの寓話に「①キツネとブドウ」というお話がある。一匹のキツネがたわわに実るブドウの房を木の枝に見つけ、なんとかとってやろうとジャンプする。何回か挑戦してみるが、とても届かない。あきらめたキツネは、「あのブドウは酸っぱいに違いないや」と言い捨てて、注1毅然とした態度で去って行くという物語である。

このキツネは、自分のジャンプ力が弱いために「甘いと思われるブドウ」を取ることができないという現実を受け入れずに、「酸っぱいに違いない」と無理やり思いこもうとしている。物語は、ウソの想像によって悔しさを紛らしたり、他者に弱みを見せない行動をとったりする注2滑稽さを指摘している。

もちろん、実際のキツネはこのような行動をとらない。想像力が低いので、「酸っぱいに違いない」と無理やり思いこむことはできないし、他者が自分をどう見ているかを考える社会性もそれほど発達していない。だから、お話を讀んだ人間が、「キツネなんだからしようがないよね!」とひとしきり笑った後で、「実はこのキツネは人間を注3象徴しているんだよ」と気づかされると、その注4嘲笑が自らへと返ってきてしまい、ギクツとさせられる。その意味で「キツネとブドウ」は、ある種の「恐ろしい寓話」とも言えるのだ。

人間には、自分の弱みを隠し、自己肯定感を高めようとする本性がある。他人に弱みを見せないようにするだけでなく、自ら弱みを自覚しないように意識から遠ざける傾向までもがある。そうして築かれた自己肯定感によって自信が生まれ、奮起できるのであるから、この傾向はあながち軽んじられない。

しかし、その結果、人間は自己肯定につながる情報に対して

Aに

なりやすい。その事実には注意が必要だ。たとえ注5フェイクニュースであっても、せつせと情報収集して自己肯定に利用してしまう。ときには、情報を拡大解釈して、無理やり自己肯定につなげることさえある。

こうした自己肯定感を無理やり高める行為を「自己欺瞞」という。いわゆる「自分だまし」であるが、人間が生活していくうえで、欠くことができない心理過程になっている。(中略)

「キツネとブドウ」のお話にちなんで、自分が得ることができないものを過小評価する心理機構を、心理学では「酸っぱいブドウ」と呼ぶ。

Bを駆使した「理由づけ」によって心の安定を維持する仕組みで、心理的な防衛機制のうちの「合理化」のひとつとされている。(中略)

恐怖や愛情が、動物の時代に由来する感情であるのに対して、②自己肯定感やそれを維持したいと思う気持ちは、主に狩猟採集時代に形成されたと考えられる。(中略)狩猟採集時代は五〇人から一〇〇人くらいの固定的な協力集団で一生を過ごしていた。ある集団に生まれれば原則一生その集団で生きたのであるから、当然、集団の一員として認められることが必要不可欠だったのである。

③狩猟採集時代の集団では、密な協力が特徴となっていた。小グループに分かれて狩猟に出かけ、とれた獲物は皆で分けて食べる。木の実が熟す時期になれば大勢で採集に出かけ、集めた木の实もまた分配するという生活だったようだ。仕事を効率的に進めるために、集団のメンバーには役割分担があつたにちがいない。たとえば、腕力が強い者は狩猟のときのやり投げ担当、目が利く者は捕食動物が襲つてこないかを監視する採集時の見張り役、といった具合である。

こうした集団では、そこに生まれ育つ子どもが「何が得意で、何の仕事をやうまくこなしてくれるか」をいち早く見きわめて、その仕事を担当

させるのがよい。逆に、子どもの側からすると、自分が得意であることを認識して、担当できる仕事を申し出るのがよい。うまく仕事ができ大人たちから認められれば、早々と大人の仲間入りなのだ。

この協力集団の環境が、私たちに特有の感情や欲求を進化させたのである。「自分には集団に欠くことができない仕事を担当できる力がある」と思う自己肯定感、そうした仕事を担当できるとアピールして、周りの人々からの承認を求めようとする欲求である。任された仕事をうまくこなすことができれば、最後に達成感と満足感が得られるわけだ。協力集団に属することが生き残るうえで不可欠だった時代ならではの事情が、私たちの行動を方向づけたのである。

この一連の過程に「フェイク」が侵入してくる。「仕事を担当できる力はいまひとつだな」と自分でうすうす思っている、「担当できる」と意欲的にアピールしてしまうのだ。すると、周りの人々も「そんなに言うのなら」と、「フェイク」にだまされたつもりになって任せてみる。その結果、いくぶん失敗を重ねるかもしれないが格好の練習になり、一人前になるまでに仕事の上達するのである。

こうして、「フェイク」が本当になつていく。これは「予言の自己成就」と呼ばれ、私たちがときどき達成の難しい目標に挑み続けるときに使うテクニクである。

たとえば、難しい課題に挑戦するとき「一カ月で跳び箱一〇段跳んで見せる！」などと、周囲の皆に公言することがそれにあたる。いったんアピールした事柄は、達成する社会的な責任を伴う。達成できなければ、「口先だけの奴だから、信用するのはやめておこう」と思われてしまう。その責任感から、なんとしても達成しなければという意欲が湧き、つらい練習も続けられるのだ。

よく考えると、この課題挑戦を始めるには、「自分には、跳び箱一〇段跳べる素質がある」と信じる必要がある。素質がある根拠が何もない状態でも、それを漠然と信じなければ始まらないのである。これが自己欺瞞の必要な理由である。

協力集団にはいろいろな仕事があり、それぞれの仕事をこなす人を誰かに割り当てなければならぬ。普通に考えれば、やったこともない仕事には自信が持てず、やりたくないと思うのが当然である。しかしそれでは協力集団は成り立たない。

私たちは、集団の長老の「君なら大丈夫。絶対できるから、自分を信じるんだ」という言葉に共感して、自信を持てるようになり、協力集団形成に成功してきた。さらに私たちは、自分自身を鼓舞して、未知の仕事でも率先して挑戦できるほど、自己肯定感を高く維持できるようにも進化した。その背景では、自己欺瞞が一役買っているわけだ。本心では「できそうにもないな」と思っているは意気込みに欠けてしまうし、大人たちから本心を見透かされてしまう。④心から「できそうだ」と思う自己欺瞞が必要だったのである。(中略)

こうしてみると、文明社会では狩猟採集時代のような密な協力集団が^{注7}希薄になっていくことに思い至る。基本的な生活を支える協力集団が周囲になれば、狩猟採集時代のような形では私たちの承認欲求は満たされない。よく言う「居場所がない」という状況はその承認欲求不全のひとつの現れだろう。そこで現代では、お金を稼ぐことで基本的な生活を支え、何らかの人間的なつながりを築くことで別途承認欲求を満たしているようだ。

ところが、お金を稼ぐことが個人的な営みになっている。⑤文明社会では、周囲の人々との競争関係が生じやすい。すると、「自己肯定感を高め

てアピールし、周囲の承認を得る」という一連の活動が、旧来は協力集団の一員になるための成人への過程であったものが、現代では、一生を通じての仕事上の活動原理となりがちなのだ。一流の企業経営者になるには「注8。ハングリー精神を持って挑戦し続けよ」と言われる背景には、市場原理にもとづく現代の文明社会が、狩猟採集時代の成人化パワーを必要としている実態がかいま見える。これでは、生涯にわたって「自己欺瞞を保って、根拠の薄い自分の能力を主張せよ」と言われているようなものである。(中略)

注9。アイデンティティや自分らしさは、もともと生まれ育った協力集団へのアピール材料であった。「自分のできる仕事はこれ」と表明して承認を得る手段であり、仕事のスキルを磨く責任を伴った小さな自己欺瞞の発揮でもあった。

ところが、協力集団が希薄になった現代社会では、むしろ複数の集団に所属して、いろいろな人々と関わる生活が奨励されるようになっていく。こうした状況でアイデンティティを模索すると、どの集団に所属する自分も自分らしく思えず、集団と関わるそれぞれの自分が仮の演技をしているように感じられる。現代では、アイデンティティを維持するには、集団ごとの数多くの自己欺瞞が不可欠になり、混乱して自分を見失ってしまう。もはやアイデンティティの確立に固執しないほうがよさそうだ。

(一部内容を省略しました)

【石川幹人『だからフェイクにだまされる』】

注1 毅然：意志が強くしつかりしていて、物事に動じないさま。

注2 滑稽さ：あまりにもばかばかしいこと。

注3 象徴：抽象的なことを、具体的な理解しやすい形で表すこと。

注4 嘲笑：ばかにして笑うこと。

注5 フェイクニュース：うその報道。事実と異なる情報。

注6 鼓舞：大いに励まし気持ちを奮立たせること。

注7 希薄：ある要素の乏しいこと。

注8 ハングリー精神：ひたすら求める気持ち。

注9 アイデンティティ：ここでは自分はどういう人間だと確信を持つこと。

問一 A に当てはまる言葉を、次のア～エから選びなさい。

ア 致命的 イ 敏感 ウ 意欲的 エ 鈍感

問二 B に当てはまる三字を本文中からぬき出しなさい。

問三 —— 線①「キツネとブドウ」とありますが、ここでの「キツネ」

の例として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 運動会が中止になったことを、秋は台風が多いので仕方がないと思ふこと。

イ 畑の野菜が生育不良であることを、肥料が足りなかったからだと思ふこと。

ウ 買うことのできない高額な宝石を、ただのつまらない石だと思ふこと。

エ 熱いお茶を飲むことができないのは、自分が猫舌だからだと思ふこと。

問四 —— 線②「自己肯定感やそれを維持したいと思ふ気持ちは、主に狩猟採集時代に形成された」とありますが、「自己肯定感やそれを維持したいと思ふ気持ちは」は何のために必要だったのですか。本文中の言葉を用いて四十字以内で説明しなさい。

問五 —— 線③「狩猟採集時代の集団」とありますが、その説明として適当でないものを、次のア～エから選びなさい。

ア 円滑に仕事を進めていくために、集団の中でそれぞれが役割を担っていた。

イ 協力集団という環境は、私たちに特有の感情や欲求を進化させていった。

ウ 集団の中で成長する子どもの仕事の能力を大人が見出す必要があった。

エ 効率的に仕事をこなすために、集団の中で仕事を交代しながら行った。

問六 —— 線④「心から『できそうだ』と思ふ自己欺瞞が必要だった

のである」とありますが、その理由を説明した次の文の 1

2 に当てはまる言葉を、本文中からそれぞれ指定された字数でぬき出しなさい。

*仕事を担当できるか自信が持てず、自分に 1 (十四字) であつても、自分を信じて 2 (八字) することで目標の達成に近づける場合があるから。

問七 —— 線⑤「文明社会」とありますが、それはどのような社会ですか。本文中から十五字でぬき出しなさい。

問八 本文の内容の説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 人間は自分の弱みに目を背け、意識から遠ざける傾向や自己肯定感を高めようとする傾向があり、そのために事実である情報のみを集め、利用する。

イ 自己肯定感をなんとかして高めるために理由づけを行い、自分をだますことを「自己欺瞞」といい、心理的な攻撃機制のひとつとされている。

ウ 集団の長老が若者たちに励ましの言葉をかけることによって、若者たちが力を発揮し、集団としての生活の質が上がっていくことを「予言の自己成就」という。

エ 複数の集団に所属し、さまざまな人と関わることで求められる今の時代では、集団ごとに自分らしさを表現し、アイデンティティを確立することに困難が伴う。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昭和二年（一九二六年）、小川万亀は小学校尋常科五年（現在の小学五年生）だった。万亀は山梨県甲府市で菓子商を営む小川屋の末っ子で、祖父と祖母の福、母親の芙美、長男の秋次、次女の英子、三女の朝美と一緒に暮らしていた。芙美は一家の中心として店を取り仕切っていたが、この年の正月明けに夫の隆吉が急な病気で亡くなり、悲しみのあまり仕事を手につかなくなった。しかし、亡くなってから七日後の法事をきっかけに、もとの通り仕事や家事に精を出すようになった。

次の日の朝から、芙美の注¹一 庇髪はきつちりと結び上げられ、店員や職人を指図する声が家中に響いた。こうなると福はどうてい芙美の敵ではない。もともと七十過ぎたからだだが、突然の不幸にはしゃいでいただけだったのだ。それでも口は勢いを得ているから、あれこれ毒づく。

「世間の物笑いになってもいいのかい。小川屋じゃ、主人が亡くなって、注²二 うちもさつちもいなくなつてるっていうに、娘んとうを、どつかのお嬢さまみたいにしてるって、みんな笑ってるさ」

福は不満でたまらないのだ。隆吉の葬式がすんだとたん、芙美は注³三 弥生を東京へ帰した。何でも大切な試験があるということだが、帰す母親も母親ではないか。一家が寄り集まって思案にくれるというのが世のありやうなのにはないか。① 芙美はあくまでも自分の流儀を押しとおそうとする。子どもたちが学校をやめ、家業を手伝え、福が何よりも大切に思う「世間さま」も納得してくれるはずなのだ。あの家も可哀想なことになったと同情もしてくる。このまま芙美が強気をとおせば、世間はそっぽを向くはずなのだ。

だいいち、注⁴四 女専出や女学校出の娘ばかりひしめく店屋に、誰が饅頭を買いに来るものか。

このことを福はこんこんと論すのだが、芙美は聞く耳を持たない。それどころか隆吉が死んだ後、痩せていつそう大きくなった目で福を睨み返す。

「お姑さん、（中略）せめて教育ぐらい受けさせてやらなあ、可哀想ずら」長男の秋次にしたってそうだと、芙美は言葉を続ける。私は三度の御飯を一度にしても、秋次を大学に行かせたかった。それを長男だから、跡取りだからとんでもないと、お姑さんたちが猛反対して中学だけにしてしまったのではないか。

今朝も出がけに、芙美と福の争っている声を聞いた。子どもたちのことで口出しはさせないと芙美が言えば、世間に笑われてもいいのかと福が脅す。店が以前どおりに動き出した今、福が自己主張するのは、娘たちの今後についてだ。

「親が死んだっていうに、娘たちがのうのと遊んでるって言われるさ。小川屋をひきたててくれる親類の者にわしは面目がたたん」

「他人は何もしちゃくれません」
芙美が言う。

「誰も御飯を食べさしちゃくれんだから、何て言われたっていいでございすよ」万亀はウールのオーバーを着た。これも東京にいる弥生が実習でつくってくれたものだ。昨年のもだから、肩のあたりがややきつくなっている。だがうつむきかげんになるのは、そのためではない。

もしかすると、小学校を卒業したら働かなければいけないという怖れは、日に日に薄れていった。女学生の朝美と英子は笑って言ったものだ。

「そんなこと、お母さんがせんよ。② あれはお婆ちゃんが言ってるだけだ」
「そんなこと、お婆ちゃんなんか、なんも力ないだから」

そうはいっても、同じ家の中で家族がいみ合っているというのは、万亀にとつて慣れることのできない経験だ。姉たちは無視することができて、

万亀はおびえてしまう。母と祖母のやりあう声を聞くたびに、X ような思いになるのだ。

教室に着いても、万亀はしばらくぼんやりしていた。注5 女子組の級長の万亀は、先生が入ってきたら「起立、礼」をかけなければいけないのだが、隣りの子につつかれるまで気づかず、最初の発声が遅れたほどだ。

「おはよう、今日はとてもいい知らせがある」

古屋先生はゆっくりと皆を見渡した後、今度はまっすぐに万亀の方を見た。

「小川の綴方が注6『赤い鳥』に入選した」

えーっと級友たちはいっせいに声をあげた。

「推奨だからたいしたもんだ。全国で二人のうちの一人だからな。鈴木三重吉先生がうんと感心して、いいことを書いてるぞ」

古屋先生は興奮を隠しきれないようだ。特徴ある注7 ミソツ歯を見せて笑った。「小川、読んでみる」。

「私が床屋の前を通ろうとすると『何だ何だ、あれは』『あれかい、ありや』注8 猿まわしだぞ。早く飛んでって見てこうや」と、雄太さんや章さんがせっこんで話しているのが聞こえた……」

最初の数行を読む間に、万亀は二度もつかえてしまった。教科書を読むのと違い、自分の綴方を朗読するというのはなんとむずかしいのだろう。照れてつい声が小さくなるのを励ますようにする。

「猿はおばさんにとびついた。おばさんは『きゃっ』と言って家の中へ逃げこんだ。猿はなおその後を追いかけまわした。『こらッ』と猿まわしは怒って、猿の頭をポンと両手でたたいた。猿は小さい毛だらけの手を合わせて首を下げてあやまった。『獣でもえらいもんだなア』と私は思って猿の横顔をじっと見つめていた」

いつのまにか級友たちはじっと聞き入っている。確かに恥ずかしいけれど

も、いつものそれとはなにか違う。晴れがましさと共に、自分の書いたものを聞かせる喜び——。それは本当に喜びだ。誰かが頷くのが気配でわかる。

万亀の言葉で、その子の注9 おかつばが揺れている。③ 嬉しい、とても嬉しい。こんな不思議な気持ちになったのは、初めてだと万亀は思う。

「北風はびゅうびゅう強く吹いていた。桑の木の続く冬の田舎道を、主人の背に乗って猿は下へ下へと行った。私は何だか猿も猿まわしも、かわいそうなような気がしてその姿が小さく消えるまで見ていた」

万亀が読み終わったとたん、古屋先生が手をぱちぱちと叩いた。皆もいっせいに拍手をする。拍手などというのは学芸会でしかないものだと思う。いた万亀はめんくらってしまふ。どうしていいのかわからないまま、すとんと椅子に腰をおろした。

「えらいもんじゃん」

隣の民子が興奮して赤い頬のまま、そっとささやいた。

「東京のえらい本に載ったぞ。本に載ったのを読むなんて、教科書を読むみたいじゃん」

古屋先生は万亀の手から、最新号の「赤い鳥」を取り上げ、後ろのページをめくった。

「えーと、小川の綴方は、鈴木三重吉先生が大変誉めておられる。いかにも実感があつて、しみじみと物哀れだと書いている。推奨のしかも第一席だ。これは小川だけでなく、この学校にとつても名誉なことです」

④ 次の日の昼休みに万亀は校長室に呼ばれた。驚いたことに、その部屋には、校長先生以外にももう一人男がいた。地元の「山梨日日新聞」の記者だと古屋先生は説明した。

灰色の背広を着た男は、万亀よりもむしろ校長先生や古屋先生と喋ってばかりいた。

「いってみれば、うちの学校の、長い間の情操教育の賜たまものだといつてもいいと思っております」

「大正に起こった『赤い鳥運動』が、今や山梨の田舎で実を結んで……」
大人たちでむずかしい話をしている。

「あのね、君……」

男は突然、万亀の方に向き直った。「君」などと呼ばれたことのない万亀は、最初自分のことだとは思わず、きよとんと目を見張った。

「君は綴方を書くのが昔から好きだったの？」

「えーと、綴方を書くようになったのは、古屋先生が担任になった時からです」

万亀はやや吃りながら答える。

「ふーん、なるほどねえ」

たいして感心もしていない様子で、男は何やら手帳に書きつける。

「それで君は将来小説家になりたいの」

「えっ」

万亀はさらに大きく目を見開いた。小説家などという言葉と自分とが、どうしても結びつかない。万亀が黙ったままなので、古屋先生が助け船を出してくれた。

「まだ小学生ですから、そんなことは考えてもいらないでしょう。ですが大変賢い子どもで、成績もいい。おうちの人も理解がありますからね、将来きつと伸びていくと思いますよ」

「ふーん、なるほどねえ」

男はそれが口癖なのか、もう一度かすかに鼻を鳴らした後、万亀の桃色のワンピースをじろりと見た。洋服など着ていて、生意気な女の子と思われるなかつただろうか万亀は心配になる。

男はそれ以外にも、いくつか短かい質問をしたが、万亀は答えるのがやつとどった。注10小使いさんが授業開始の鐘を鳴らしたのをきっかけに、教室に戻るように言われた。新聞記者などという人種に出会った万亀は、席に着いてもなかなか注11動悸がおさまらなかつた。

それから一週間たち、新聞記者の記憶も薄れかけた頃、万亀は大きな声で英子に起こされた。

「早く起きろし！ 起きろしってば」

うつすらと目を開けると、すぐ近くに英子の笑顔があつた。いつもはうちでいちばん寝坊の英子なのに、すでにきちんと女学校の制服に着替えている。

⑤万亀のことが新聞に載つてるよ。ほら、早く見ろし」

かなり大きな見出しで「第二の樋口一葉現わる」と書かれていた。だがこの見出しと自分とが、どう関係あるのか万亀にはわからない。

「樋口一葉っていうのはね、明治時代のうんとえらい女の小説家なんだよ。ほいでこの人の両親は、山梨県の出身だから、一応山梨ゆかりの女流小説家っていうことになつてるだよ。それと万亀をひっかけてるわけさ」

英子が興奮して喋り始めると、隣りの布団から朝美の手が伸びて、新聞を奪つた。

「なに、なに……。えーと、『このたび発売された〈赤い鳥〉において、山梨県女子師範附属小学校尋常科五年の小川万亀さんの綴方が、見事推奨に選ばれた。選者の鈴木三重吉氏も、素晴らしい観察力と才能に溢れた作品と絶賛している……』。わあー、すごいじゃん」

寝巻きのままで朝美は起き上がった。そして上に羽織をまとつたと思うと、すごい勢いで走り出した。英子も万亀も後を追う。三人の娘たちは、冷たい朝の廊下をびたびたと駆ける。いつもだったら許されない行為だが、今朝は許してもらえないに違いなかつた。

「お婆ちゃん、お母さん、新聞見た！」

台所では福と芙美が葱を刻んでいるところだった。

「とっくに見たさ。それで英子を起こしたんだよ」

芙美は鍋を^{なべ}かけながら苦笑いする。その前に朝美は立ちふさがるようにして、再び新聞を読み始めた。

「万亀さんの家は、菓子商を営んでおり、祖父母、母親、兄、三人のお姉さんの八人家族。父親の隆吉さんは今年の一月に亡くなったが、おうちの人は万亀さんの才能を伸ばし、^⑥将来は小説家になりたいと張りきっている……。わあ、こんなの嘘だよ。誰も聞きにこなかったよ。新聞って嘘つくだねえー」

朝美が言って皆は笑った。福でさえ包丁を片手に持ったまま、歯のない口を大きく開けて笑っている。こんなふうにいっぺんに皆が喜び、笑うのは久しぶりだ。芙美と福をかわるがわる見つめ、万亀は幸福のあまり泣きたくなかった。

(一部内容を省略しました)

【林真理子『本を読む女』】

注1 庇髪：大正時代に若い女性たちのあいだで流行した髪型。

注2 にっちもさっちもいなくなってる：物事が行き詰まって身動きが取れなくなっている。

注3 弥生：小川家の長女。東京の裁縫^{ほう}学校に通っていた。

注4 女専出や女学校出の娘：女子専門学校や高等女学校を卒業した女子。当時の義務教育は小学校までで、卒業した女子が進学するのが高等女学校、そこを卒業して専門的な知識を身に付けるために進学するのが女子専門学校であった。小川家では、長女が東京の女子専門学校、次女と三女が地元的高等女学校に通っており、万亀も高等女学校への進学を希望していた。

注5 女子組の級長：当時この学校では、男女で学級が分かれていた。級長は、学級委員のこと。

注6 『赤い鳥』：作家の鈴木三重吉が大正七年（一九一八年）に創刊した児童文芸雑誌。当時第一線で活躍する文学者の、芸術性豊かな童話などを掲載するとともに、児童の綴方（作文）の指導にも力を入れていた。万亀の担任の古屋先生も綴方教育を重視し、児童に書かせた綴方でよく書けたものを、毎月『赤い鳥』に投稿^{こう}していた。

注7 ミソツ歯：欠けて黒くなった歯。

注8 猿まわし：猿に芸をさせる芸能。また、それを職業にする人。

注9 おかつば：前髪を眉^{まゆ}の上で、後ろをえりもとで切りそろえた女子の髪型。

注10 小使いさん：用務員さん。

注11 動悸：胸がどきどきすること。

問一 —— 線①「芙美はあくまでも自分の流儀を押しとおそうとする」とありますが、芙美の考えとして適当でないものを、次のア～エから選びなさい。

ア 頼りにならない親類の意見で、子供の育て方を変える必要はない。

イ 子供には勉強や遊びにうちこんで、父の死の悲しみを乗り越えてほしい。

ウ 生活に必要なお金を削ってでも、子供に高い教育を受けさせたい。

エ 子供に学校の勉強をさせることの方が、身内の慣習よりも大事だ。

問二 —— 線②「あれはお婆ちゃんが言ってるだけ」とありますが、「あれ」とはどのようなことですか。「お婆ちゃん」がそう考える理由もふくめて、「すべきだということ。」に続くように三十字以内で説明しなさい。

問三 —— Xに当てはまる言葉を、次のア～エから選びなさい。

ア 目をおおう イ 足がすくむ

ウ 胸が痛む エ 頭を抱える

問四 —— 線③「嬉しい、とても嬉しい」とありますが、万亀はどのようなことについて、「嬉しい」と感じたのですか。四十字以内で分かりやすく説明しなさい。

問五 —— 線④「次の日の昼休みに万亀は校長室に呼ばれた」とありますが、この場面の説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 新聞記者は、小学生の万亀を大人と対等な存在として取材を行い、意見を引き出そうとした。

イ 新聞記者は、万亀の才能だけでなく、それを伸ばした教育についても興味深そうに取材していた。

ウ 万亀は、深く考えたり言葉を選んだりする余裕もなく、緊張して新聞記者の質問に答えていた。

エ 万亀は、自分がどう話しても新聞記者に思いが伝わらないので、気持ちが落ち込んでいった。

問六 —— 線⑤「万亀のことが新聞に載ってるよ」とありますが、ここでの出来事を通じて万亀はどのような気持ちになりましたか。それを説明した次の文の I、II、III に当てはまる言葉を、それぞれ本文中からぬき出して答えなさい。

*それまで I いた家族が、この出来事で II ようになったので、III な気持ちになった。

問七 —— 線⑥「将来は小説家になりたい」とありますが、新聞記者は取材時のどの言葉をもとにしてこのように書いたと考えられますか。その一文を本文中からぬき出し、最初の八字を答えなさい。

問八 本文の内容の説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 鈴木三重吉は万亀の綴方について、確かな観察力と豊かな感情表現によつて描かれている点を高く評価した。

イ 英子はこの日たまたま早起きして、万亀が新聞に載っていることを知り、すぐに本人に知らせようとした。

ウ 古屋先生は万亀の入賞を誰よりも喜ぶ一方で、万亀にはこれに満足せず努力をするように、指導を行った。

エ 同級生たちが自分の綴方を賞賛するために拍手してくれたことに、万亀は戸惑いながらも誇らしさを感じた。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「多様性の尊重」とは、人にはそれぞれ A の意見や価値観があり、少数意見であっても多数派の意見と同等に尊重されるべきである、という考え方のことである。しかし、現実社会の問題を解決しようとする場合、「多様性を尊重」することは、決して a ヨウイなことではない。

一つ例を挙げて考えてみよう。あなたはある村の村長だとする。その村に道路建設の話が持ち上がった。村民の意見は建設賛成派と反対派で真つ二つに分かれた。賛成派は、人の流れ ① の増加による経済効果や、交通の利便性が高まることを賛成理由に挙げた。一方、反対派は建設にかかる多額の b ヒヨウや交通量の増加による環境や治安 B の悪化を理由に挙げて建設に反対した。意見の割合では賛成派と反対派の差はわずかだった。村長のあなたは決断をせまられた――。

このような場合に、「多様性を尊重」しつつ、問題を解決するにはどうしたらよいだろうか。多様な意見がある場合の問題解決の方法としてよく用いられるのが多数決である。しかし、多数決では ② 意見の「多様性」が尊重されたとは言えない。一方、話し合いで解決すればよいという考え方もあるだろう。けれども、話し合い C の結果、意見が一つにまとまるとは限らない。その結果、最終的には村長の独断や多数決で決めるということになりはしないか。では、全員の意見が一致するまで道路建設は c ホリユウするといふ D のはどうか。その場合、結論が出るまでの間、ずっと今の状態が続くため、事実上 X の意見が尊重されているのと同じになる。

私たちは、現実にかような場合に直面することが少なくない。その中で「多様性を尊重」しつつ問題を解決する方法を考えることが大切だ。

問一 線 a ～ c のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 線 ① 「の」と同じ働きではないものを、線 A ～ D から選びなさい。

問三 線 ② 「意見のく言えない」とありますが、その理由を説明した次の文の [] に当てはまる言葉を本文中から三十字以内でぬき出し、最初と最後の三字を答えなさい。

* 「多様性の尊重」という視点から問題を解決しようとするのならば、 [] だから。

問四 [] X に当てはまる言葉を本文中から三字でぬき出しなさい。

問五 本文の説明として適当でないものを、次のア～エから選びなさい。

ア 第一段落では文章のテーマとそれについての論点を示している。

イ 第二段落では論点を具体的に説明するための例を挙げている。

ウ 第三段落では論点についての様々な人の意見を引用している。

エ 第四段落ではあらためて論点を示し筆者の意見を述べている。

問六 線 「村長のあなたは決断をせまられた」とありますが、「村長のあなた」は道路建設の問題をどのように解決しますか。次の(1)・(2)の点をふまえて意見を述べなさい。

(1) 道路建設を「進める」か「止める」のどちらかを選ぶこと。

(2) その場合どのように「多様性を尊重」するのかを示すこと。

四 次の各問いに答えなさい。

問一 次の1～5の各文の□に数字を表す漢字をそれぞれ一字ずつ入れて、四字熟語を完成させなさい。(同じ漢字を何度使用してもよい。)

- 1 遠くに住む友人と再会できる日を□日□秋の思いで待つ。
- 2 お金に困って大切な着物を□束□文の値段で売る。
- 3 夏休みは□□時中ゲームばかりして過ごしてしまった。
- 4 何度失敗しても□転□起してあきらめない。
- 5 朝□暮□の口先だけの言葉にごまかされてはいけない。

問二 次の1～5について、右の文の——線どうしの関係と同じ関係

になる言葉の組み合わせを、それぞれ左の文のア～オから選びなさい。

- 1 私の父は、中学校の国語の先生だ。
ア 小さな イ公園で ウ 子どもたちが エ楽しそうに オ遊ぶ。
- 2 満開に なったら みんなで 花見に行こう。
ア のどが イかわいたので ウ 冷たい エ飲み物を オ 飲みたい。
- 3 今日のわが家の 夕ご飯はカレーライスとサラダだ。
ア 長く イ厳しい ウ 冬が エようやく オ 終わった。
- 4 朝から 雨が激しく降っている。
ア 赤ちゃんを イ起こさないように ウ 静かに エドアを オ 閉めた。
- 5 毎日の 運動こそ健康をたもつ方法だ。
ア あの イ本だよ、 ウ 昨日 エ私が オ 読んだのは。